

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

ちやくじぐほう こと

(適時弘法の事)

新版
1896
〜
1897

うえのどのごへんじ ちやくじぐほう こと

上野殿御返事（適時弘法の事）

こうあん ねん がつ にち さい なんじようときみつ

弘安2年（'79）12月27日 58歳 南条時光

はくまいいち駄 送 た お いったい とき 依

白米一だ、おくり給び了わんぬ。一切のことは時によるこ

そうろう はる はな あき つき もう とき ほとけ よ

とに候か。春は花、秋は月と申すことも時なり。仏も世に

出 たま ほけきよう そうら

いでさせ給いしことは法華経のためにて候いしかども、

しじゅうよねん 説 たま ゆえ きようもん 説 そうろう

四十余年はとかせ給わず。その故を経文にとかれて候に

せつじ いた ゆえ とう うんぬん 夏

は、「説時のいまだ至らざるが故なり」等と云々。なつ、

厚 綿 小袖 ふゆ 帷 給 そうろう 嬉

あつわたのこそで、冬、かたびらをたびて候は、うれしき

冬 小袖 夏 帷 過

ことなれども、ふゆのこそで、なつのかたびらにはすぎず。

飢

そうろうとき

金

渴

とき

御

料

うえて候時のこがね、かつせる時のごりようは、うれし

飯

みず

過

ほとけ

つち

進

きことなれども、はんと水にはすぎず。仏に土をまいら

そうろうひと

ほとけ

成

たま

進

じごく

行

もう

せて候人、仏となり、玉をまいらせて地獄へゆくと申す

こと、これか。

にちれん

にほんこく

う

誑惑

盗

日蓮は、日本国に生まれて、わわくせずぬすみせず、か

失

まつだい

ほっし

失

薄

み

たがたのとがなし。末代の法師にはとがうすき身なれども、

ぶん

好

おう

ぶ

捨

色

好

ひと

しょうじき

文をこのむ王に武のすてられ、いろをこのむ人に正直もの

憎

ねんぶつ

ぜん

しんごん

りつ

しん

よ

のにくまるるがごとく、念仏と禅と真言と律とを信ずる代

あ

ほけきよう

弘

おうしん

ばんみん

憎

に値って法華経をひろむれば、王臣・万民にくまれて、

けつく

さんちゆう

そうら

てん

はか

たも

結句は山中に候えば、天いかんが計らわせ給うらん。

ごしやく

雪 降

もと

通

やまみち

塞

訪

五尺のゆきふりて、本よりもかよわぬ山道ふさがり、とい

来 ひと

ころも

薄

寒

防

じき絶

くる人もなし。衣もうすくてかんふせぎがたし。食たえて

いのち

終

刻

命

妨

命すでにおわりなんとす。かかるきざみに、いのちさまた

おん

訪

喜

歎

いちど

げの御とぶらい、かつはよろこび、かつはなげかし。一度に

思

き

飢

死

案

き

そうら

おもい切つてうえしなんとあんじ切つて候いつるに、わず

灯

油

い

添

かのもしびにあぶらを入れそえられたるがごとし。あわ

尊

みこころ

しやかぶつ

ほけきよう

れ、あわれ、とうとくめでたき御心かな。釈迦仏・法華経、

さだ

おんはか

たま

きようきようきんげん

定めて御計らい給わんか。恐々謹言。

こうあんになんじゅうにがつにじゅうしちにち
弘安二年十二月二十七日

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

にちれん
日蓮

かおう
花押